

## 2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	尚 爾華
最終学歴	学 位	専門分野
札幌医科大学大学院医学研究博士課程修了	博士（医学）	公衆衛生学 予防医学

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

##### 【理念】

広い教養と深い専門知識を身につけ、少子高齢社会において地域の健康と福祉に貢献できる能力を有する人材を育成する。私が credo として掲げる「教学相長をモットーに」に則り、教員と学生が教えあい、共に成長していくことを理念とする。

##### 【目標】

乳幼児から高齢者まで人間の健康に関する基本的な知識を十分身につけることを目標とする。

##### 【方針】

理論と実践をバランスよく学び、習得した知識を基盤として、応用可能なスキルへ発展させていくことが教育方針である。

##### 【計画（方法）】

教育にあたっては、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」に基づいた教職員の心構えを基本として、学生のモチベーションを維持し、効果的な指導を心がける。オンライン授業の工夫や、外部講師（ゲストスピーカー）の招聘、学外で行う多様な実践的な学習活動を取り入れる。

##### 【担当科目】

（前期）

わたしたちの身体、食と健康、人間健康学、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、総合演習Ⅰ

（後期）

栄養学、学校保健、健康管理論（人体の構造と機能及び疾病）、小児保健論、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、総合演習Ⅱ

#### ○教育方法の実践

- ・ オンライン授業において以下の工夫を行った。

オンライン授業 (Teams) に関しては、昨年の経験を活かし、事前の設定や個別対応など工夫し、初回の授業からスムーズに実施できた。また、オンライン授業でも、実践実習の内容を取り入れ、学生同士で身体測定を実施した。

- ・ 外部講師（ゲストスピーカー）による授業を積極的に取り入れた。

講義科目 1 科目と演習科目 3 科目において、それぞれ現場実務者や専門資格保持者（計 4 人）をゲストスピーカーとして招聘し、学生が様々な視点から学ぶ機会を提供することができた。

- ・ 積極的な学外の実践活動を行った。

学外フィールドワークとして、2 年生ゼミ活動は市内スポーツ施設でボルダリング体験会（名

東区)を実施した。3年生ゼミ活動は健康公開セミナー「食品の品質管理」に参加した(中区)。  
4年生ゼミ活動はマラソンフェスティバルナゴヤ・愛知2024団体ボランティア(団体名:愛知東邦大学しょうゼミ)活動を行った(マラソン大会コース沿道)。ゼミの学外フィールドワークを通じて、大学授業で学んだ「食と健康」、「運動と健康」に関する理解を深めることができた。

#### ○作成した教科書・教材

教科書としては、学部教員らの共同執筆により出版された『人間健康学』(唯学書房2023.2刊行)第7章「健康を支える食と栄養」を執筆した。必須科目「人間健康学」の教科書として使用される。そのほか、すべての授業において、300枚前後の授業資料(PDFや動画、スライド)を作成した。また、毎回の授業には5~10問からなる課題シートを作成した

#### ○自己評価

昨年と同様、演習活動において、2年生、3年生、4年生がそれぞれ学外フィールドワークを行い、ゲストスピーカー授業を多数導入したことで、授業の内容を多彩にし、学生の満足度を高めたと考える。実践的な学習活動および学生同士が共同作業を行う機会を多く設けることが出来たのは大きな成果と言える。また新科目「健康実践演習」では、2年ゼミ学生がファシリテーター役を務め、1年生(60人×2回)を対象に調理講習会を企画運営し、自信を持って積極的な勉強姿勢が見られた。

演習以外の授業では、なるべく分かりやすく、復習しやすいように設計し、更にTeamsの使用法について事前の設定や個別対応など工夫を行った。対面授業においても意欲的に学習に取り組む姿勢が多く見られた。授業アンケート評価から学生が満足できる教育効果が得られたと考える。

また、教員の学外活動(健康公開セミナー)、ボランティア活動に、ゼミ所属の学生らも一緒に参加させることで、学生達にとっていつもと異なる視点での学びを提供し、良い刺激になったと考える。

## II 研究活動

#### ○研究課題

##### 課題1

**Association between beauty consciousness and subjective well-being among older females:  
A cross-sectional study**

##### 課題2

**Art engagement and positive psychological well-being among community-dwelling older adults in Japan:A cross-sectional study**

#### ○目標・計画

##### 【目標】

課題1と課題2のテーマとする国際学会にて(IAGG Aisa/Oceania Regional Congress 2023 June 12-14, 2023)に発表する(筆頭演者1題、共同演者1題)。

課題1と課題2をテーマとする論文を執筆し、学術専門誌へ投稿をする。

国内学会へ演題の投稿をする

中国上海など海外の研究機関と連携する。

学術専門誌の査読委員として貢献する。

## 【計画】

2023年6月12日～14日に開催される国際学会（IAGG Aisa/Oceania Regional Congress 2023）において、採用された課題1（筆頭演者）、課題2（共同演者）に関する発表を行う。学会発表で得た知見を加味して、上記の研究成果をまとめて学術専門誌へ投稿をする。

第69回東海公衆衛生学会（2023年7月8日）、に開催される第82回日本公衆衛生学会（2023年10月31日～11月2日）において、共同演者としての発表を通して、研究の視野を広げる。

その他、中国上海浦南病院科研課が主催する研究セミナー（2023年4月27日）において、中国在住の若手医療関係者を対象とした「日本語研究文献の検索方法の入門」をテーマに、オンライン発表を行う。

学術専門誌に依頼された原著論文の査読を引き受け、専門誌の編集出版に貢献する（2023年5月）

## ○2016年4月から2024年3月の研究実績（特許等含む）

### （著書）

- 丸岡利則、伊藤龍仁、大勝志津穂、鈴木恵三、尚爾華、孫穎、呂洋、野口泰司、西尾敦史、渡辺弥生、王亜婷、馬利中、劉衛東、金良泰、上條憲二. 地域創造研究所叢書 No35 『少子高齢社会のヒューマンサービス』唯学書房、2022年12月
- 尚爾華、丸岡利則、馬利中、李冬冬、劉鳳新、渡辺弥生、鈴木恵三、野口泰司、中山佳美. 地域創造研究所叢書 No34 『高齢者の保健・福祉・医療のパイオニア』唯学書房、2020年10月
- 尚爾華、加藤利枝子、中川弘子、渡邊美貴、鈴木貞夫、中山佳美、森満、馬利中、中野匡隆、丸岡利則. 地域創造研究所叢書 No32 『高齢社会の健康と福祉のエッセンス』唯学書房、2019年11月
- 尚爾華、澤田節子、谷村祐子、肥田幸子、中野匡隆、木野村嘉則. 地域創造研究所叢書 No27 『長寿社会を健康に生きる—地域の健康づくりをめざして—』唯学書房、2017年3月

### （学術論文）

- Taiji Noguchi, Takeshi Nakagawa, Ayane Komatsu, Erhua Shang, Chiyoe Murata, Tami Saito. Role of Interacting and Learning Experiences on Public Stigma Against Dementia: An Observational Cross-Sectional Study. *Dementia (London, England)* 14713012231207222-14713012231207222 (2023年10月19日)
- Taiji Noguchi, Erhua Shang. Association of positive attitudes toward beauty and personal grooming with subjective well-being among older women. *Geriatrics & gerontology international* (2023年9月14日)
- Taiji Noguchi, Takeshi Nakagawa, Ayane Komatsu, Erhua Shang, Chiyoe Murata, Tami Saito. Development of a Short Version of the Dementia Stigma Assessment Scale. *Asia-Pacific journal of public health* 35(6-7) 456-458 (2023年9月)
- Taiji Noguchi, Erhua Shang, Takeshi Nakagawa, Ayane Komatsu, Chiyoe Murata, Tami Saito. Establishment of the Japanese version of the dementia stigma assessment scale. *Geriatrics & Gerontology International* 22(9) 790-796. (2022年9月)
- 尚爾華、野口泰司、中山佳美. 地域在住女性高齢者における現在歯数20本未満の関連要因～名古屋市体操教室参加者における調査～. *口腔衛生学会雑誌* 第70巻第1号. 27-33頁. (2020年1月)
- 尚爾華、平井一正. 中国の大学生における理想体型・生活習慣および健康状況の自己評価についての調査. *名古屋産業大学論集* 第34巻 17-22頁. (2019年11月)
- 尚爾華、加藤利枝子、中川弘子、渡邊美貴、鈴木貞夫. 女性高齢者の年齢階級別にみた健康状況と生活習慣に関する調査. *東海公衆衛生雑誌* 第7巻第1号 114-119頁. (2019年7月)
- 尚爾華、郭芳、楊叶、顧軍、姜麗英、中山佳美. 上海市小学生におけるシーラント処置状況に関

する調査～一次予防の実施状況と児童の口腔衛生環境について～. 東邦学誌第 48 巻第 1 号 59-63 頁. (2019 年 6 月)

- ・ 尚爾華、徐静、王慧華、徐秀婷、王 亜婷、中山佳美. 上海小学生における未処置歯の有病状況と治療状況に関する調査～二次予防の実施状況と児童の口腔衛生環境について～. 東邦学誌第 48 巻第 1 号 65-70 頁. (2019 年 6 月)
- ・ 尚爾華、王亜婷、馬利中. 「中国上海にある医療機関従事者における出産・子育てに関する意識調査～「二人っ子政策」開始 2 年間の現状をふまえて～」『東邦学誌』第 47 巻第 1 号 91～98 頁. (2018 年 6 月)
- ・ 尚爾華. 「大学生の食生活実態と食育の課題～朝食の欠食頻度に焦点を当てて～」『東邦学誌』第 46 巻第 2 号 151～153 頁. (2017 年 12 月)

(学会発表)

- ・ 鈴木恵三、飯田恭子、尚爾華、大西浩文. 国民生活基礎調査「日頃健康のために実行している事柄」の 65 歳以上者の実施割合. 第 82 回日本公衆衛生学会 (2023 年 11 月 2 日)
- ・ 鈴木恵三、飯田恭子、尚爾華、大西浩文. 「国民生活基礎調査大規模調査 1986 年 (第 1 回) ～2019 年 (第 12 回)」に見る、65 歳以上の者の健康意識の割合年次推移. 第 69 回東海公衆衛生学会 (2023 年 7 月 8 日)
- ・ 野口泰司、中川威、小松亜弥音、尚爾華、村田千代栄、斎藤民. 認知症スティグマ評価尺度の短縮版の作成. 日本老年社会科学会第 65 回大会 (2023 年 6 月 17 日)
- ・ Taiji Noguchi, Erhua Shang. Art engagement and positive psychological well-being among community-dwelling older adults in Japan: A cross-sectional study. International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) Asia/Oceania Regional Congress (2023 年 6 月 14 日)
- ・ Erhua Shang, Taiji Noguchi. Association between beauty consciousness and subjective well-being among older females: A cross-sectional study. International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) Asia/Oceania Regional Congress (2023 年 6 月 14 日)
- ・ Taiji Noguchi, Takeshi Nakagawa, Ayane Komatsu, Erhua Shang, Chiyoe Murata, Tami Saito. Interactions with People with Dementia, Learning Experiences, and Public Stigma Against Dementia . The Gerontological Society of America (GSA) 2022 Annual Scientific Meeting. Indianapolis, America. (2022 年 11 月)
- ・ 野口泰司、尚爾華、中川威、小松亜弥音、村田千代栄、斎藤民：認知症スティグマ評価尺度の日本語版の作成. 日本老年社会科学会第 64 回大会. 東京都. (2022 年 7 月)
- ・ 鈴木恵三、飯田恭子、尚爾華. 介護サービス相談員派遣等事業の経過、東海地区（岐阜県、静岡県、愛知県、三重県）の概況. 第 68 回東海公衆衛生学会学術大会. (2022 年 7 月)
- ・ 尚爾華、野口泰司、北澤一利、中野匡隆、肥田幸子、渡辺弥生、鈴木恵三、森満. 介護予防施策としての「通いの場」が参加者の心身に及ぼす影響：アクションリサーチによる事例報告. 第 32 回日本疫学会学術大会. 東京都. (2022 年 1 月)
- ・ 鈴木恵三、尚爾華、中野匡隆、北澤一利、森満. ふまねっと運動、東海地方の広がり. 第 66 回東海公衆衛生学会. 岐阜県各務原市. (2020 年 7 月)
- ・ 尚爾華. 中国「二人っ子政策」による少子化対策の効果に関する一考察—上海市医療職女性における出産・子育てに関する意識調査 (第 2 回) の結果から. 第 84 回日本健康学会総会. 長崎県長崎市. (2019 年 11 月)
- ・ 尚爾華、野口泰司、中山佳美、森満、中川弘子、渡邊美貴、依馬加苗、鈴木貞夫. 2018 年中国上海市小学生未処置歯の保有と治療状況～学校健診結果と日本の比較～第 78 回日本公衆衛生学会

総会. 高知県高知市. (2019年10月)

- 依馬加苗、中川弘子、渡邊美貴、細野晃弘、柴田清、近藤文、若林諒三、市川麻理、野口泰司、上島寛之、尚爾華、永谷憲司、鈴木貞夫. 一般住民における職種と主観的ストレスとの関連: J-MICC Study 岡崎. 第78回日本公衆衛生学会総会. 高知県高知市. (2019年10月)
- 尚爾華. 中国北京市大学生における健康状況の自己評価と生活習慣・ストレスとの関連. 日本ヒューマンヘルスケア学会第3回学術総会. 愛知県大府市. (2019年9月)
- 尚爾華、上田裕司. 中国都市部大学生の身長、体重、体格指数および理想体型に関する調査. 第62回東海学校保健学会学術集会. 静岡県浜松市. (2019年9月)
- Erhua Shang. The integrative analysis of Chinese college students' lifestyles and health. 第62回東海学校保健学会学術集会. 静岡県浜松市. (2019年9月)
- 上田裕司、尚爾華. 薬物乱用防止教育に対する中学校教員の意識と関連要因—質問紙調査の分析結果から—. 第62回東海学校保健学会学術集会. 静岡県浜松市. (2019年9月)
- 尚爾華、野口泰司、中山佳美、森満、中川弘子、西山毅、渡邊美貴、小嶋雅代、今枝奈保美、神谷真有美、依馬加苗、加藤利枝子、鈴木貞夫. 地域在住女性高齢者における現在歯数の関連要因. 第65回東海公衆衛生学会学術総会. 愛知県名古屋市. (2019年7月)
- 野口泰司、中川弘子、西山毅、渡邊美貴、細野晃弘、柴田清、神谷真有美、尚爾華、市川麻理、若林諒三、上島寛之、永谷憲司、依馬加苗、山田珠樹、鈴木貞夫. 高齢者の就労および働きが健康感に及ぼす影響: 5年間の縦断研究. 第65回東海公衆衛生学会学術総会. 愛知県名古屋市. (2019年7月)
- 尚爾華、加藤利枝子、中川弘子、鈴木貞夫. 女性高齢者における年齢階級別健康状況・生活習慣および主観的な健康度に関する調査～名古屋市内にある体操教室の女性参加者を対象に～. 静岡県浜松市. (2018年7月)

(特許)

(その他)

#### ○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

- 2022年4月～2023年3月  
全国老人福祉施設協議会令和4年度調査研究助成事業 (研究協力者)
- 2020年4月～2023年3月  
愛知東邦大学地域創造研究所少子高齢化社会の健康と福祉の国際比較研究部会共同研究費 (研究代表者)
- 2020年4月～2021年3月  
国立長寿医療研究センター長寿医療研究開発費 (研究分担者)
- 2018年4月～2020年3月  
愛知東邦大学地域創造研究所少子高齢化社会の健康と福祉研究会共同研究費 (研究代表者)
- 2016年4月～2018年3月  
愛知東邦大学地域創造研究所地域の健康づくり研究会共同研究費 (研究代表者)

#### ○所属学会

日本公衆衛生学会、日本ヒューマンヘルスケア学会、日本学校保健学会、日本疫学会、東海公衆衛生学会、日本混合研究学会

#### ○自己評価

昨年度愛知県フィールドにおける調査研究の結果を共同研究者との研究チームより国際学術誌に投稿し、英文論文3本が採用され、掲載することができた。また国際学会では2題（うち筆頭演者1題）、国内学会2題（共同演者）を発表した。本年度は22年度から2年間の調査研究の成果を広く発信することができたと考える。

### Ⅲ 大学運営

#### ○目標・計画

##### 【目標】

人間健康学部長補佐として学部運営に尽力する。地域創造研究所副所長・運営委員会副委員長として、研究所運営に貢献する。自己点検・評価実施部会のメンバーとして業務を遂行する。広報委員会委員として本学の知名度を高める活動に努める。

##### 【計画】

人間健康学部長補佐として、大学事業計画に基づき、学部長の指導の下で学部運営に尽力する。地域創造研究所副所長・運営委員会副委員長として、所長に協力して、研究活動の活性化、発信力の向上を念頭に貢献する。自己点検・評価実施部会のメンバーとして、業務を遂行する。広報委員会委員として、大学ブランディングコンセプト「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」に基づき、本学の知名度を高める活動に努める。

#### ○学内委員等

地域創造研究所副所長・運営委員会副委員長、自己点検・評価実施部会委員、広報委員会委員、女子バスケットボール部部长

#### ○自己評価

人間健康学部長補佐として大学事業計画に基づき、学部長を補佐し、学部運営に精力的に取り組み、役割を果たした。地域創造研究所副所長・運営委員会副委員長として所長に協力して、研究活動の活性化、発信力の向上を念頭に貢献した。研究所主催するシンポジウムの広報活動、新規研究員として学内外研究者数名を紹介し、「知のプラットフォーム」である地域創造研究所の運営に貢献した。自己点検・評価実施部会のメンバーとして、業務を遂行した。広報委員会委員として、大学ブランディングコンセプト「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」に基づき、ラジオ収録、SNS発信など本学の入試広報活動に努めた。

大学女子バスケットボール部部长として監督と協力し、選手のサポートなど部の運営に貢献した。

### Ⅳ 社会貢献

#### ○目標・計画

##### 【目標】

地域団体、教育機関、市町村に協力し、地域住民と交流する。

##### 【計画】

地域に関わる講演会の講師依頼を積極的に引き受け、愛知東邦大学の教員として地域との関係性を深めることに努める。地域とのつながりを大切にし、本学の知名度向上に貢献していきたい。

#### ○学会活動等

国際学会、国際学会において研究発表をし、学術専門誌の査読委員として貢献した。

#### ○地域連携・社会貢献等

- ・ 中国上海浦南病院科研課が主催する「2023年臨床科学研究における医学分野外国語を用いた文

献検索フォーラム」において、中国在住の医療関係者約 100 名を対象とし、「日本語文献の検索方法の入門」をテーマに、オンライン発表を行った。日本と中国の医療従事者の研究活動の交流に貢献した（2023 年 4 月 オンライン）

- ・ 東邦高校 PTA 役員研修会講師として健康関連の講座を担当し、アジアの食をテーマに高校生の保護者と国際交流活動を行った。人間健康学部 3 年生 1 名アシスタントとして同行した（2023 年 12 月 会場：東邦高校）
- ・ 愛知県健康管理士会主催する健康公開セミナー「食品の品質管理」において、3 年・4 年ゼミ学生計 12 名と共に参加し、参加者の地域住民とのディスカッションを通じて交流を行った（2024 年 1 月 会場：イーブル名古屋）。
- ・ NPO 法人ふまねっと研修センター（札幌市白石区）において、地域在住の高齢者、小学生、大学生と「ふまねっと運動体験会」、「学習支援イベントを見学視察し、地域の健康づくりについて地域住民と意見交換を行った。その後名古屋市内の専門学校（名古屋市中川区）において「運動と健康」を学ぶ専門学校 1 年生 20 名および地域在住高齢者を対象に、同様なイベントを実施した。（2024 年 1 月～2 月）
- ・ マラソンフェスティバルナゴヤ・愛知 2024 の団体ボランティアとして、ランナーや大会スタッフと交流し、4 年ゼミ学生（計 5 名）と共に社会貢献活動を行った。（2024 年 3 月 会場：マラソン大会沿道）

#### ○自己評価

地域に関わる健康講座や国際交流イベントの講師依頼を積極的に引き受け、愛知東邦大学の教員として地域との関係性を深めることに貢献できた。また、これらの活動に学生にも同行させることで、学生の地域への関心や、社会貢献の意識向上にも教育的な効果が見られた。

#### V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等） 特になし

#### VI 総括

教育面では、オンライン授業と対面授業に独自の工夫をし、授業アンケートの結果から概ね満足できる教育効果があったと考えられる。本年度全学 FD において学生授業アンケート最も評価の高い授業として事例発表を行い、次年度も継続して授業の創意工夫を加える。

研究面では、筆頭著者として国際学会での発表、共著者として学術専門誌に論文（英文 3 本）が掲載されたことが大きな研究成果である。

大学運営面では、学部長補佐として学部の業務を遂行し、学部の運営に貢献した。地域創造研究所においては、副所長として所長に協力し研究所の運営に貢献した。地域連携・社会貢献の面においては、地域住民への健康増進に関する普及活動、国際交流活動を継続し、関連スキルを高めることが出来た。

総括として、多くの実践活動と新たな試みによって、学生の授業満足度が高まり、広く研究成果を発信することができた。また、大学運営の面においても新たな経験と学びがあり、私自身の成長が大きく実感できた 1 年であった。次年度はその経験を生かして、さらなる貢献できるように邁進していきたい。

